

## ダニエル書7章23-27節(黙示録13章)「獣の国」

### 1A 獣の国に向かう預言 黙示録10-12章

- 1B 神の奥義 10
- 2B 底知れぬ所から登って来る獣 11
- 3B 女を呑み込もうとする竜 12

### 2A 獣の国 黙示録13章

- 1B 獣の姿 1-2
- 2B 荒らす者 3-10
  - 1C 竜に与えられた力 3-4
  - 2C 神への冒瀆 5-6
  - 3C 聖徒への迫害 7-10
- 3B もう一人の獣 11-15
  - 1C 獣の代理人 11-13
  - 2C 獣の像 14-15
- 4B 獣の刻印 16-18

## 本文

ダニエル書の学びですが、前回、7章を読み終わりました。三回に渡ってお話しましたが、それでもまだ網羅できていない部分があります。それは、このダニエルの預言があつて、新約聖書にある、主ご自身の、また使徒たちの終わりの日の教えがあるということです。特に黙示録は、ダニエルの預言を基として、使徒ヨハネがイエス様から啓示を受けたと言えるでしょう。そこで、今晚はこのことをじっくりと見ていきたいと思ひます。まず、ダニエル書7章の最後のところを読みたいと思ひます。23節から27節までです。「23 彼はこう言った。『第四の獣は地に起こる第四の国。これは、ほかのすべての国と異なり、全土を食い尽くし、これを踏みつけ、かみ砕く。24 十本の角は、この国から立つ十人の王。彼らの後に、もう一人の王が立つ。彼は先の者たちと異なり、三人の王を打ち倒す。25 いと高き方に逆らうことばを吐き、いと高き方の聖徒たちを悩ます。彼は時と法則を変えようとする。聖徒たちは、一時と二時と半時の間、彼の手に乗ねられる。26 しかし、さばきが始まり、彼の主権は奪われて、彼は完全に絶やされ、滅ぼされる。27 国と、主権と、天下の国々の権威は、いと高き方の聖徒である民に与えられる。その御国は永遠の国。すべての主権は彼らに仕え、服従する。』」

世の終わりについて、どれほどダニエルの預言に目を留めなければならないかと言ひますと、それは、主ご自身が世の終わりについて弟子たちの問いに答えられる時に、ダニエルの預言に触れたからです。マタイ24章15-22節を読みましょう。「15 それゆえ、預言者ダニエルに

よって語られたあの『荒らす忌まわしいもの』が聖なる所に立っているのを見たら——読者はよく理解せよ——16 ユダヤにいる人たちは山へ逃げなさい。17 屋上にいる人は、家にある物を取り出そうとして下に降りてはいけません。18 畑にいる人は上着を取りに戻ってはいけません。19 それらの日、身重の女たちと乳飲み子を持つ女たちは哀れです。20 あなたがたの逃げるのが冬や安息日にならないように祈りなさい。21 そのときには、世の始まりから今に至るまでなかったような、また今後も決してないような、大きな苦難があるからです。22 もしその日数が少なくされないなら、一人も救われられないでしょう。しかし、選ばれた者たちのために、その日数は少なくされます。」預言者ダニエルによって語られた、「荒らす忌まわしいもの」とイエス様は言われています。これは、次のダニエル書 8 章の中に出てきます。この時に、これまでにない大いなる苦難を、イスラエルの残りの民が受けるのです。ここでの、「選ばれた者」というのは、ユダヤにいる人々、つまりユダヤ人の人たちであります。イスラエルの残りの民です。ダニエル書 7 章では、聖徒と呼ばれている人々の主体が、イスラエルの残りの民のことで、彼らが、荒らす忌むべき者の手の中に入ってしまいます。それが、ダニエル 7 章では、「**聖徒たちは、一時と二時と半時の間、彼の手に委ねられる。**」と言われ、聖なる民を悩ます人物であります。イエス様は、「**選ばれた者たちのために、その日数は少なくされます。**」と言われましたが、それが、「**一時と二時と半時の間**」であり、三年半の間です。その後、この獣、反キリストは、やがて来られるキリストご自身によって滅ぼされます。

このように主ご自身から、ダニエルの預言にしたがって、大患難のこと、そしてその時に試練を受ける残りの民のことをお語りになられたのです。そして何度となく話していますが、使徒パウロは、ダニエルの預言をしっかりと、テサロニケの新しい信者の語り、それを第二の手紙 2 章で、「不法の人」として取り上げています。

### 1A 獣の国に向かう預言 黙示録10-12章

そして、使徒ヨハネが受けたイエスご自身からの啓示です。黙示録は、七つの教会に対して語られ、2 章と 3 章には、今ある事として、それぞれの教会に対して主が語られました。そして、4 章から「**この後必ず起こることを、あなたに示そう**」として、天の情景を御使いが見せました(4:1)。それが、ダニエル書 7 章にもあった、天の御座、父なる神の御座でした。それから黙示録 5 章で、子羊がこの方の前に現れて、全世界の土地権利証書である巻物を受け取られました。そこには七つの封印がありますが、一つ一つ解くと、災いが下りました。第七の封印を解くと、そこから七人の御使いがラツパを吹き鳴らします。

### 1B 神の奥義 10

そして 10 章から、大きな変化が起こります。力強い御使いが、雲に包まれて天から降って来て、地と海の上に立ちました。彼の手には開かれた巻物があったのです。そうです、七つの封印が読かれた巻物です。そして、このように宣言するのです。10 章 5-7 節です。「**5 それから、海の上と地の上に立っているのを私が見たあの御使いは、右手を天に上げ、6 天とそこにあるもの、地**

とそこにあるもの、海とそこにあるものを造って、世々限りなく生きておられる方にかけて誓った。「もはや時は残されておらず、7 第七の御使いが吹こうとしているラツパの音が響くその日に、神の奥義は、神がご自分のしもべである預言者たちに告げたとおりに実現する。」時が残されていない、神の奥義がことごとく実現する。その奥義は、預言者たちに告げられていたものだというのです。これから、ことごとく預言者に語られていたことが実現するというのです。

これが、ダニエル書 7 章から 12 章までに語られている終わりの日の幻が、基になって、出来事が次々と展開していきます。

### 2B 底知れぬ所から登って来る獣 11

初めに出てくるのは、二人の証人です。黙示録 11 章において、エルサレムにある神殿が再建されて、しかし、外庭が異邦人に与えられています。しかし、42 か月の間、踏みにじられることとなります(2 節)。42 か月、つまり、荒らすいまわしい者が聖なる所に入るとイエス様が言われた、ダニエル書 9 章 27 節に書かれている出来事です。

しかし、その前に、その三年半の期間の大きな患難の前に、1260 日間、預言する二人の証人が出てきます。二人の証人については、ゼカリヤ書 4 章でそのような人物が出てくると預言されていた人々です。彼らがエルサレムで、再建された神殿について、その偽りを暴くような預言を行なうのだと思われます。モーセやエリヤのように、火を噴くような預言を行ない、事実、口から火が出て、敵を焼き尽くす、害を与えようとするならば殺されるというような力を持っています。

ところが、11 章 7 節にこう書いてあります。「二人が証言を終えると、底知れぬ所から上って来る獣が、彼らと戦って勝ち、彼らを殺してしまう。」ここの、「底知れぬ所から上って来る獣」というのが、反キリストです。ダニエル書 7 章の第四の獣であり、イエス様の語られた、荒らす忌まわしい者です。その二人は、三日半の間、死体がさらされたままになっていますが、生き返って、天に昇って行きます。底知れぬ所、というのは、悪霊どもが幽閉されているところではありますが、具体的なことは 13 章に出てきます。この獣は、傷を受けて死んだ者のようになりませんが、生き返るのです。

### 3B 女を呑み込もうとする竜 12

その前に、獣の背景になっている存在が 12 章に現れます。赤い竜です。竜ですが、旧約聖書には、蛇ともされ、レビヤタンとも呼ばれています。「イザ 27:1 その日、【主】は、鋭い大きな強い剣で、逃げ惑う蛇レビヤタンを、曲がりくねる蛇レビヤタンを罰し、海にいる竜を殺される。」レビヤタンは、ヨブ記 41 章に詳しく描かれています。どう見ても、恐竜のような姿で、海にいて、口から火を噴いています。まさに竜の姿です。また、蛇とも呼ばれていますから、そこで思い出すのは、エバを惑わしたあの古い蛇です。

この蛇、竜に、サタンが働いていることを、黙示録 12 章ははっきりと言っています。「黙 12:9 こうして、その大きな竜、すなわち、古い蛇、悪魔とかサタンとか呼ばれる者、全世界を惑わす者が地に投げ落とされた。また、彼の使いたちも彼とともに投げ落とされた。」竜、古い蛇、サタンが終わりの日における災難の黒幕です。彼が天における戦いで、地に投げ落とされ、最後のあがきを行ないます。

そして 12 章は、もう一つの人物、女が出てきます。その女は、太陽をまとして、月を足の下にして、頭に十二の星の冠をかぶっています(1 節)。これは、ヨセフが見た夢であり、イスラエルの家族のことです。つまり、イスラエルの民のことです。そこから出てきた子を竜が食べてしまおうとします。それが、キリストご自身であり、ヘロデ大王がベツレヘムにいる男の子を全て殺したことにも現れています。けれども、この方はよみがえり、天に昇られます。その後に残された女を、地上に落とされた竜が追いかけます。しかし、女は荒野に逃げます。そこで、出てくるのです、「一時と二時と半時」が。「12:14 しかし、女には大きな鷲の翼が二つ与えられた。荒野にある自分の場所に飛んで行って、そこで一時と二時と半時の間、蛇の前から逃れて養われるためであった。」これが、聖徒たちが獣の手に入るとダニエルが 7 章で預言したこと、またイエス様が、マタイ 24 章で、荒らす忌むべきものが聖なる所に立ったら、ユダヤの人たちが山々に逃げなさいといわれたことです。

ところで、山々に逃げて、また荒野に逃げるということが言われていますが、ユダの山地に住んでいるユダヤ人にとって、山々と聞いたら、ヨルダン川を越えた高地です。特に、死海の南東に広がっているエドムの地は、山々が連なっています。その中に、ボツラと聖書に書かれているところ、今はギリシア語の「ペトラ」と呼ばれているところと言われています。イスラエルの残された民は、そこに隠れて一命を留めるのですが、12 章の最後で、竜が海辺のほうに移動する姿を見ます。「12:17-18 すると竜は女に対して激しく怒り、女の子孫の残りの者、すなわち、神の戒めを守り、イエスの証しを堅く保っている者たちと戦おうとして出て行った。18 そして、竜は海辺の砂の上に立った。」

## **2A 獣の国 黙示録13章**

現場が荒野から海になります。そう、ダニエル書 7 章が海から出てきた獣であることを思い出してください。まさに、その獣が出てきます。

### **1B 獣の姿 1-2**

<sup>1</sup> また私は、海から一頭の獣が上って来るのを見た。これには十本の角と七つの頭があった。その角には十の王冠があり、その頭には神を冒瀆する様々な名があった。<sup>2</sup> 私が見たその獣は豹に似ていて、足は熊の足のよう、口は獅子の口のようであった。竜はこの獣に、自分の力と自分の王座と大きな権威を与えた。

第四の獣が、第一から第三の獣を踏みつけ、自分の者になっている姿として現れています。第四の獣は、地上の獣では形容しがたい、恐ろしい姿をしているとだけ出ています。しかし、ここでは、豹に似ているとあります。そして、足は熊、口は獅子の口です。つまり、獅子は第一の獣でバビロンを表していました。熊は第二の獣で、メディア・ペルシアを表していました。そして第三の獣が豹です。そして第四の獣は、十本の角を持っていました。この獣も十本の角を持っています。第四の獣ですが、ローマのようであり、それ以上の存在、終わりの日の獣の姿です。

違いがあります。それは、「七つの頭があった」というところです。このことについて、17章で御使いが詳しく説明しています。また、ダニエル書 8 章を読まないで、このところは説明が難しいです。

それから、獣の特徴は、ダニエル書 7 章にあったように神を冒瀆することです。「その頭には神を冒瀆する様々な名があった。」とあります。

そして、とても大切なのは、「竜はこの獣に、自分の力と自分の王座と大きな権威を与えた。」というところです。彼は、この国を支配する一人の人物ですが、悪魔の力、王座、そして大きな権威が与えられます。この尋常ではない大きな力によって、豹の敏捷さによって支配を一気に広めます。また熊の力のように、物量や人海戦術によって支配していきます。そしてバビロンのように、小さな国々を獅子のように喰らっていきます。

竜が獣にこのように権威を与えているのを見て、分かって来るのは、悪魔が、神の選ばれたキリストに対抗するために、父なる神がキリストに行われたことを真似することで対抗します。神のなさることを真似することで、人々が真理ではなく偽りを信じるように惑わすのです。

神は、キリストにご自分の力と位と権威を与えられましたが、悪魔は反キリストに自分の力と位と権威を与えます。覚えているでしょうか、荒野で 40 日間断食された後、悪魔が彼にやってきて誘惑しましたが、彼はイエスを高い山に連れて行き、この世のすべての国々とその栄華を見せて、「マタ 4:9 もしひれ伏して私を拝むなら、これをすべてあなたにあげよう。」と言いました。アダムが罪を犯したので、アダムに与えられた万物の支配が悪魔に明け渡されてしまいました。しかし、神はキリストにこれらの支配権、力、位を与えられて、キリストにあって人々が万物を支配する権利を取り戻そうとしておられます。そのために神はキリストをこの世に遣わされました。しかし、悪魔は誘惑をして、今、この国々の栄華を与えると言ったのです。けれども、イエス様は世界をご自分のものとするために、十字架の道を歩まなければいけません。その苦しみを通られて、その流される血を代価として、初めて全世界をご自分のものとし、その勝利をキリスト者に分捕り物の分け前をして、そして父なる神のものとするのです。ですから、イエスが、十字架に行かれるのをいさめたペテロに対して、「下がれ、サタン。(マタイ 16:23)」と言われたのは、そのためです。

しかし、悪魔はある人物に同じようにして、全ての国々を与えるようにさせ、その人物はそれを受け取ります。彼が反キリストです。キリストは竜の差し出したものを退け、十字架の道を進まれ、反キリストは竜の差し出したものを受け入れ、そのまま権威と位と力を自分のものにするのです。

## 2B 荒らす者 3-10

### 1C 竜に与えられた力 3-4

<sup>3</sup> その頭のうちの一つは打たれて死んだと思われたが、その致命的な傷は治った。全地は驚いてその獣に従い、<sup>4</sup> 竜を拝んだ。竜が獣に権威を与えたからである。また人々は獣も拝んで言った。「だれがこの獣に比べられるだろうか。だれがこれと戦うことができるだろうか。」

頭の一つは反キリストを示しています。彼が打たれて死んだと思われたとありますが、14 節に「剣の傷を受けながらも生き返った」と書かれています。このように、このほとんど復活のように、致命傷から癒された出来事は、既に 11 章 7 節にありました。「底知れぬ所から上って来る獣が、彼らと戦って勝ち、彼らを殺してしまおう。」とあります。底知れぬ所、つまり悪霊どもが幽閉され、後に悪魔自身が幽閉される所に落ちていたのですが、そこから上がって来るということです。この反キリストが致命傷を受ける姿を、ゼカリヤは次のように預言していました。「11:17 わざわいだ。羊の群れを見捨てる、能なしの牧者。剣がその腕と右の目を打ち、その腕はすっかり萎えて、右の目の視力は衰える。」

こうやって、神がキリストを甦らせることによって、この方が全能の神の御子であることを明らかにしたという真似事をしているのです(ローマ 1:4 参照)。この方が甦られ、昇天して神の右の座に着かれましたが、それによってこの方が主であると全ての人々が告白して、父なる神がほめたたえられるようになります。今、3-4 節で読んだのは、このことの真似事です。人々は獣が生き返ったと思い、獣に従います。そして、獣に権威を与えたのは竜なので、竜を拝みます。ピリピ 2 章 9-11 節で、イエス・キリストが主であると、すべての舌が告白して、父なる神がほめたたえられるとありますが、まさにそのパロディー、真似事です。

キリストに従って、この方を礼拝する者たちがいる一方で、大勢の人々が、獣に従い、獣を拝んでいきます。その違いは何なのでしょう？キリストが悪魔の誘惑を退けた動機であります。十字架への道です。この方の十字架を信じて救われた者たちは、古い自分がキリストと共に死んだとみなして、キリストと共によみがえったと信じています。この福音を受け入れているのか、それとも、自分を愛して拒むのかという違いです。テサロニケ第二 2 章を開いてください。9-12 節を読みます。「9 不法の者は、サタンの働きによって到来し、あらゆる力、偽りのしるしと不思議、10 また、あらゆる悪の欺きをもって、滅びる者たちに臨みます。彼らが滅びるのは、自分を救う真理を愛をもって受け入れなかったからです。11 それで神は、惑わす力を送られ、彼らは偽りを信じるようになります。12 それは、真理を信じないで、不義を喜んでいたすべての者が、さばかれるようになる

ためです。」キリストと、キリスト十字架なしの福音というのが、福音ではなく、最悪の知らせなのです。この方を素通りして、世の救いを求めれば、そこには反キリストがいて、反キリストに従い、あがめるようになるのだということです。

## 2C 神への冒瀆 5-6

<sup>5</sup> この獣には、大言壮語して冒瀆のことばを語る口が与えられ、四十二か月の間、活動する権威が与えられた。<sup>6</sup> 獣は神を冒瀆するために口を開いて、神の御名と神の幕屋、また天に住む者たちを冒瀆した。

悪魔がエバを惑わしたのは、「あなたが神のようになる」というものでした。神を認めず、神を拒み、自分が神のようになるという誘惑です。この傲慢の罪が終わりの日には最も明らかな形で現れます。ダニエル書 11 章には、反キリストがこのことを行なうことが預言されています。「11:36 この王は思いのままにふるまい、すべての神よりも自分を高く上げて大いなるものとし、神々の神に向かって驚くべきことを語る。彼は栄えるが、ついには神の憤りで滅ぼし尽くされる。定められていることがなされるからである。」テサロニケ第二 2 章 4 章には、「不法の者は、すべて神と呼ばれるもの、礼拝されるものに対抗して自分を高く上げ、ついには自分こそ神であると宣言して、神の宮に座ることになります。」と書いてあります。これが許されるのが、「四十二か月間」とありますが、これが三年半の間にこれを行ないます。そして、神の御名を汚すだけでなく、「神の幕屋、また天に住む者たちを冒瀆した。」と言っています。既に、天において神を賛美している、救われた魂、既に携挙されている教会が黙示録 5 章に出て来ます。神を汚し、またキリストの救いを受けたキリストを信ずる者を汚すのです。

人間中心主義によって、神の主権を退けていく動きは、反キリストの霊によるものです。キリスト者の生活というのは、神とキリストのゆえに、自由な者とされたがゆえに、かえってその自由を愛によって人々に仕える生活であります。そしてキリストが十字架を担がれた時に、それはローマの主権に屈服する印でありましたが、その主権さえも神からのものであるとみなして、神にあって従う姿であります(ローマ 13:1 参照)。キリスト者にとって敬虔にかなう生活とは、社会生活、家庭生活において、主にあって従うことであることが教えられています。妻はキリストにあって夫に従い、夫はキリストが愛されたように妻を愛し、子は親に従い、奴隷はキリストにあって主人に仕えます。

しかし、違った教えが教会に中に入り込んでいく危険をパウロは警告していました。「1テモテ 6:3-5 違ったことを教え、私たちの主イエス・キリストの健全なことばと、敬虔にかなう教えに同意しない者がいるなら、4 その人は高慢になっていて、何一つ理解しておらず、議論やことばの争いをする病気にかかっているのです。そこから、ねたみ、争い、ののしり、邪推、絶え間ない言い争いが生じます。5 これらは、知性が腐って真理を失い、敬虔を利得の手段と考える者たちの間に生じるのです。」そして、ペテロ第二とユダの手紙には、まさに反キリストと同じような権威を侮る教師

たちの姿を描いています(2ペテロ 2:10-11)。それで、反キリストが来る前に、この反キリストの霊が働いていて、高慢になりキリストご自身を否定する偽教師が現れることを伝えています。「1ヨハネ 2:18 幼子たち、今は終わりの時です。反キリストが来るとあなたがたが聞いていたとおり、今や多くの反キリストが現れています。それによって、今は終わりの時であると分かります。」

### 3C 聖徒への迫害 7-10

<sup>7</sup> 獣は、聖徒たちに戦いを挑んで打ち勝つことが許された。また、あらゆる部族、民族、言語、国民を支配する権威が与えられた。

ここが、ダニエル7章で、「その角は聖徒たちに戦いを挑み、彼らに打ち勝った。」という部分です(21節)。7章、14万4千人の神のしもべ、イスラエル人たちによって、世界の大勢の人々が患難期に入ったのにも関わらずイエスを信じていきます。しかし、教会の時代とは様相が変わっていません。教会の時代にも世の勢力が教会に対して戦っていることには変わりがありません。しかし、教会には天からの鍵が与えられていることを主がペテロに言われました。そして、「マタ 16:18 よみの門もそれに打ち勝つことはできません。」という約束があります。キリスト教会は、世からの迫害を受けても、多くが殉教してもなおのこと生き残り、福音は広まり、信じる者も増えていきます。その教会は取り上げられます。しかし大患難において主は、反キリストが聖徒たちに勝利することを許されます。イエス・キリストを信じたらそのまま殺され、その後何に残らない定めにあります。

<sup>8</sup> 地に住む者たちで、世界の基が据えられたときから、屠られた子羊のいのちの書にその名が書き記されていない者はみな、この獣を拝むようになる。

世界はすべて反キリストの支配に入ります。しかし、「世界の基が据えられたときから、屠られた子羊のいのちの書にその名が書き記されて」いる者たちは拝みません。黙示録の教会に対しても、「わたしは、その者の名をいのちの書から決して消しはしない。」という約束があります(3:5)。そして、教会に対しても、「世界の基が据えられたときから」が強調されています。「エペソ 1:4 すなわち神は、世界の基が据えられる前から、この方であって私たちを選び、御前に聖なる、傷のない者にしようとされたのです。」大患難の時の聖徒たちの迫害は、殉教のみが選択肢となります。けれども、その圧力にさえ屈することなく、死を選び取ることができるのは、自分の力ではなく、キリストのうちに自分を選んでくださった、神の主権によるのです。世の初めから永遠のいのちに定めておられる、その神の選びの力が、人々を死に至るまで忠実でいさせることができます。

<sup>9</sup> 耳のある者は聞きなさい。<sup>10</sup> 捕らわれの身になるべき者は捕らわれ、剣で殺されるべき者は剣で殺される。ここに、聖徒たちの忍耐と信仰が必要である。

ここでは、自衛行為をしてはならないという戒めです。反キリストが聖徒に勝利する権威は、三



年半という期間のみ、神によって許されたものであるので、それに逆らっても成功しないという戒めです。これはちょうど、イエスが十字架につけられるときに、ペテロに対して主が言われた言葉でもあります。「マタ 26:52 剣をもとに収めなさい。剣を取る者はみな剣で滅びます。」それで、「ここに、聖徒たちの忍耐と信仰が必要である。」忍耐があって、信仰があるという対が大事です。死ぬしか選択肢がないという状況の中で、それでも、42 か月間の間だけなのだという信仰を持つことが出来ます。

### 3B もう一人の獣 11-15

#### 1C 獣の代理人 11-13

<sup>11</sup> また私は、別の獣が地から上って来るのを見た。それは、子羊の角に似た二本の角を持ち、竜が語るように語っていた。

ここは、ダニエル書 7 章には啓示されていない新しい知識です。1 節にある海から出て来た一匹の獣、反キリストとは異なる、もう一匹の獣ということです。そして「別の」のギリシア語では、「同じ性質をもった別のもの」という意味の言葉です。反キリストと同じような力、位、権威を持っているということです。この言葉で思い出す約束はないでしょうか？そうです、イエス様が聖霊の約束を弟子たちに与えられた時に、「もうひとりの助け主(ヨハネ 14:6)」とありましたね。つまり、この偽預言者はキリストに対する聖霊の働きと、似たようなこと、物まねを行なうのです。

しかし彼は、「地から上って来た」とあります。初めの獣が海から出てきていましたが、その海は様々な国、国語、民族などを表していました。世界における国々の興亡を、その荒波の立つ海が象徴していました。では、この地上は何を示しているのでしょうか？これは、「天に対する地」を表しています。先に、反キリストが「13:6 天に住む者たちを冒瀆した。」とありました。どんなに、まことしやかなことを言っても、しるしを行なうことができても、それでも天から生まれた者ではない、地に属する者です。

偽預言者は「子羊の角に似た二本の角」を持っているとあります。イエス様が七つの角をもった小羊として現れておられたことが、黙示録 5 章 6 節に書いてあります。角は権威や力を表していますが、二本の角を偽預言者は持っています。つまり、ここでキリストの権威の真似事をしているのです。それで、「竜が語るように語っていた。」とあります。彼は、力と権威によって語ります。イエス様が、山上の垂訓を語り終えられた時に、聞いている人たちが驚いたことを思い出してください。他の教師たちと異なり、力と権威によって語られたからです。神の権威と力があるからです、その物真似をしているのです。

<sup>12</sup> この獣は、最初の獣が持っていたすべての権威を、その獣の前で働かせた。また、地と地に住む者たちに、致命的な傷が治った最初の獣を拝ませた。<sup>13</sup> また、大きなしるしを行い、人々の前で

火を天から地に降らせることさえした。

初めの獣が政治的な指導者の要素が強い一方、この獣は宗教的な要素が強い人物であります。そして、「最初の獣が持っていたすべての権威を、その獣の前で働かせた。」とあります。自分自身に栄光を帰すのではなく、初めの獣、反キリストに人々が礼拝するように仕向けていきます。イエス様が、もう一人の助け主、御霊についての働きを次のように言われました。「ヨハネ 16:14 御霊はわたしの栄光を現されます。わたしのものを受けて、あなたがたに伝えてくださるのです。」御霊はご自身の栄光ではなく、キリストの栄光を現します。ですから、私たちが礼拝をし、祈り、御言葉を聞き、賛美をする中で聖霊の働きが顕著になってきた時に、聖霊ご自身のことが語られるというよりも、キリストご自身の御業と栄光が現れますね。これに似せて、偽預言者は獣を拝ませるのです。

彼はまた、徴を行ないます。これはあたかも、エリヤのような働きであり、また黙示 11 章に出て来た二人の証人のような働きであります。ですから、それも真似することができるので、人々は彼について行くようになるのです。覚えていますか、出エジプト記で、主がパロの前で、モーセとアロンを通して徴を与えられました。杖を蛇に変え、また戻すというようなものです。けれども、そこにファラオの魔術師が同じ事をしました。それで、ファラオの心は頑なになりました。このように神の働きを真似て、神の働きを無効にしようと仕向けるのです。

#### 2C 獣の像 14-15

<sup>14</sup> また、この獣は、あの獣の前で行うことが許されたしるしによって、地に住む者たちを惑わし、剣の傷を受けながらも生き返ったあの獣の像を造るように、地に住む者たちに命じた。<sup>15</sup> それから、その獣の像に息を吹き込んで、獣の像がものを言うことさえできるようにし、また、その像を拝まない者たちをみな殺すようにした。

獣が、剣で傷を負って死んだようになっていたのに、生き返ったので、それを使って獣の像を拝ませます。キリストの御国においては聖霊によって、神の愛によってキリストをあがめるようにされますが、獣の国では強制させます、人々に要求するのです。そして、患難期の半ばに、次のことが起こるとパウロは預言します。「Ⅱテサ 2:4 不法の者は、すべて神と呼ばれるもの、礼拝されるものに対抗して自分を高く上げ、ついには自分こそ神であると宣言して、神の宮に座ることになります。」そして、その獣礼拝は彼の像をそこに置くことによって実行されます。私たちは、ダニエル 3 章で、ネブカドネツアルが金の像を造って拝ませたところを学びました。そして、8 章、次の章でも、ギリシアの王がユダヤ人の聖所を覆すことが書かれていますが、それはゼウス像を神殿の中に安置して、それを拝ませるようにしたからです。歴史において、それが何度となく繰り返されてきましたが、獣の国では、像への礼拝を強要します。

そしてなんと、その像に息を吹き込み、物を言わせるようにします。これは恐ろしい事ですが、オカルトの世界の深みではあり得ることです。黙示録のティアティラにある教会でも、偽預言者のイゼベルが行なっていることが、「サタンの深み(2:24)」とされています。

#### 4B 獣の刻印 16-18

聖徒たちに対するとてつもない圧迫はこれだけに終わりません。

<sup>16</sup> また獣は、すべての者に、すなわち、小さい者にも大きい者にも、富んでいる者にも貧しい者にも、自由人にも奴隷にも、その右の手あるいは額に刻印を受けさせた。<sup>17</sup> また、その刻印を持っている者以外は、だれも物売り買いできないようにした。刻印とは、あの獣の名、またはその名が表す数字である。

エゼキエル書9章に、エルサレムで行われている忌み嫌うことに悲しんでいる人々の額に、しるしをつけよとの命令があります。エペソ書1章においては、聖霊によって私たちが贖いの証印を押されたところを見ました。黙示録7章には、14万4千人のイスラエル人に、神のしもべとして「証印を押される」という神の働きを見ます。その彼らが9章においては、いなごのような悪霊が、さそりの毒を持っているのですが、印が押されているので、害を受けずに済んでいます。イスラエルの民に対しては、主の命令を、「申6:8 これをしるしとして自分の手に結び付け、記章として額の上に置きなさい。」とありますが、自分の動かす手、自分の目の上にあるところに主の命令があるのか？ということが問われているのですが、神の名が額の上にあるということは、主の前にいつも自分がいることを意識させられますね。そして獣の国では、その物真似をするのです。獣の名の刻印を押されます。そして、その対象は無差別であり、全住民の登録です。

これは経済的迫害です。「その刻印を持っている者以外は、だれも物売り買いできないようにした。」であります。ここで、いつも話題になります。かつてはバーコード。今は、体内チップ。そして、コロナ禍においては、ワクチン・パスポートが獣の刻印かと言われる始末です。技術的にそのようなことが可能になったということであればその通りですが、どのような形態なのかが大事なのではなく、目的です。

当時、この黙示録の朗読を聞いていたキリスト者は、どう聞いていたのか？これは、間違いなく皇帝礼拝です。数多くの民族がいて、国々があったローマをまとめるためには、皇帝による統合が必要でした。それで新たに皇帝礼拝をおこないます。皇帝の像を造り、そこで焼香を上げさせます。その像は、アゴラ、市場の前にあたりします。市場で売り買いをするところに、その像があるので、焼香を上げなければ、そこで監視している人が、「こいつは、皇帝を拝まなかった」と大声で言いふらすのです。それで、その人は売り買いできなくなるのです。

つまり、こうやってこの人がだれの住民なのか、どこの国に属しているのかの踏み絵をさせられるというのが、本質です。ですから、江戸時代の初期から始まった、キリストの根絶のための踏み絵、五人組制度、寺請制度、今も檀家制度として残っているのは、反キリスト的な制度であると言えます。このために、自分がキリストに従うのを拒んでしまうことが、今でも起こっています。ワクチン・パスポートで、キリストの国に属するかどうか？は図られませんね。国がもうけた像を拝むわけでもありません。ここが目的です。

<sup>18</sup> ここに、知恵が必要である。思慮ある者はその獣の数字を数えなさい。それは人間を表す数字であるから。その数字は六百六十六である。

知恵がいる、思慮ある者は獣の数字を数えなさいとのことです。このように命令されているのですから、私たちは獣の名を表す「六百六十六」に注目しなければいけません。これは名前を表して、人間を差しているといっています。ギリシア語、ヘブル語、そしてラテン語においても、それぞれのアルファベットに数字があてがわれています。これを、「ゲマトリア(gematria)」と言います。名前のアルファベットを足すと、その合計が六百六十六になるというものです。これが最も妥当な解釈と言えるでしょう。全ての名前に、ゆえに数字をあてがうことができます。例えば皇帝ネロは、当時反キリストではないかと思われました。彼の名前のヘブル語読み(נרוא)の数を足すと、六百六十六になるのだそうです。彼のキリスト者迫害の背後には、明らかに反キリストの霊が働いていました。

そしてこの数字には、意味があります「人間を表す数字」です。七が完全数で神を示しているならば、六は神より劣る人間を示している数字と言えます。人は神のかたちに造られましたが、「あなたは人を御使いよりわずかに欠けがあるもの(詩篇 8:5)」として造られました。しかし、人は神にいくら劣るといところで留まることを拒みたがります。神に似た者ではなく、神になりたいと思います。神に劣るのですから、神との結びつき、神の支配に服従することによって、神の子として世界を支配することができるのに、神から独立したいと思うようになっているのです。こうした高ぶりが、「六」の数字に含有されているようです。

ゴリヤテがダビデに対峙した時に、彼の背の高さが六キュビト半、また槍の穂先が六百シェケルとあります。ゴリヤテは、人間の武器によって戦おうとしていましたが、ダビデは、「万軍の主の御名によって、おまえに立ち向かう。(1サムエル 17:45)」と言っています。そしてネブカドネツアルの先ほどの金の像の寸法も、「3:1 その高さは六十キュビト、その幅は六キュビトであった。」とあります。さらに、そこに音楽を奏でる楽器を数えると、六種類になっています(3:5 等)。神によってその権威と力、栄華が与えられたのに、それを自分の栄光に帰そうしていたのです。そして、ソロモンの時代の富、金の重さであります。「1列王 10:14 一年間にソロモンのところに入って来た金の重さは、金の目方で六百六十六タラントであった。」ソロモンが初め、主に愛されて、富を当たられ

ましたが、徐々に主ご自身への愛から、その富と栄華に目が言ってしまったということです。この僅かな、神から人への栄光の転換が、反キリストの霊をよく表しているといえます。

こうやって、獣の国がどういうものかを知りました。しかし今回、それでも、荒らす忌まわしいものであるとか、像を造るであるとか、少しは説明しましたが、まだまだ足りない情報があります。ダニエル書 8 章そして 9 章にかけて、そのことの背景にあるダニエルの預言があります。

最後に、私たちキリスト者にとって、反キリストの霊に対抗できる言葉を読みたいです。ヨハネ第一の最後です。「5:19-21 私たちは神に属していますが、世全体は悪い者の支配下にあることを、私たちは知っています。20 また、神の御子が来て、真実な方を知る理解力を私たちに与えてくださったことも、知っています。私たちは真実な方のうちに、その御子イエス・キリストのうちにいるのです。この方こそ、まことの神、永遠のいのちです。21 子どもたち、偶像から自分を守りなさい。」御子にこそ真理があり、いのちがあり、この方に留まっていることが真実な知識です。それ以外のところに真理があるとすれば、そこから偶像礼拝が始まります。